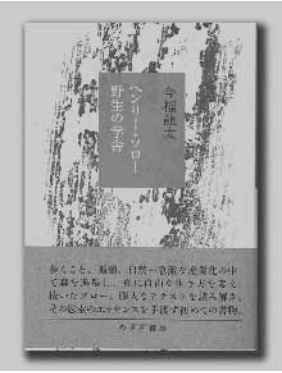

井ノ上 羽菜

今福 龍太
『**ヘンリー・ソロー 野生の学舎**』（みすず書房、2016 年）

> ソローの書いたものを、本という完成形から見ないようにすること。さらに一歩踏み込んで、ソローが物質としての「書物」、商品としての「本」をけっして書こうとはしていなかった、と考えるところからはじめること。（133 頁）

ヘンリー・デイヴィッド・ソロー Henry David Thoreau（1817-1862）は生前に 2 冊の本を刊行し、生前は未発表だった膨大な日記を書き残しているが、彼の思想を読み解くことは、紙に残された文字を追うことのみによっては成し得ない。ソローの「本」「文章」「文字」を、それらの言葉の定義を超えていくものとして捉えること。著者はソローの書いたものを「本という完成形から見」ず、日記の文章を「永遠に水の上で揺れながら明晰な像を結ばない」ものであると評し、その肉筆を「冬の凍結したウォールデン湖の氷の微細な縞模様に似たものとして読む」可能性を探る。

本書は、雑誌「みすず」に 2014 年 8 月から 2015 年 11 月まで、12 回にわたって著者が連載した文章を書籍化したものであり、2017 年、第 68 回読売文学賞を受賞したが、その際の分類が「随筆・紀行部門」であったということは興味深い。この本はまさに、ソローという、先駆的かつ独創的であるがゆえにつかみどころのない思想の持ち主を追いかける、著者の学びの旅の過程を記したものであり、著者はソローと結託して、私たち読者がその道を追いかけること、そして私たち自身の「野生の学舎」で学ぶことを勧めているのである。

本著は、まだその半分以上が出版されていない、膨大なソローの日記にスポットライトを当てている。20 歳のときから死去直前まで、24 年間にわたって書き続けられたソローの日記。ソローの原稿は悪筆で読みづらかったということは有名な話だが、他者に読ませることを目的として書かれたのではない日記の文章においては、とりわけその傾向が強かった。悪筆に加え、ソローが文章で使用する語彙の幅広さも、彼の日記の解読を困難にしている。このようなエピソードを、作家の悪筆に悩まされた出版社の苦労話として片付けるのは容易だが、筆者はこのソローの日記を「めくるめくばかりに瞬間変容を繰り返す、エーテル体のような霊妙なエクリチュール」として捉え、解読の難しさや、判別上の揺らぎに新たな意味を見出す。

ソローと同時代の作家、ナサニエル・ホーソーン（1804-1864）がソローの文章を評して、「湖

が樹木で覆われた自らの岸辺を映し出しているような」つまり自然そのものが書きつけたような文章であると述べたというが、筆者はこのホーソーンの指摘した感覚とソローの悪筆とをつなげ、ソローという人間の生命、そして自然の息吹が、文字あるいはスケッチとしてソローの手から流れ出たのではないかというビジョンをわたしたちに提示する。ソローはしばしば、散歩の途中で目にした自然の切れ端、雲や葉っぱなどの形を鉛筆で白いメモにスケッチし、1 日の終わりには自らの部屋で、森でのメモやスケッチを拡張する形で、日記を書いた。文字を書くこととスケッチをすることは、ソローにとってはシームレスに繋がるひと続きの行為であったようだ。

筆者はソローの肉筆が「ときに「文字」という規範化された形態をはるかに飛び越えて、自然物の姿に似て」いることを「極めて正当な出来事」だと認識するようになる。著者はソローの書く、他者には判別しづらい悪筆を、不完全な文字としてではなく、葉脈の模様や波のかたちなどの自然物、鉛筆で描かれたスケッチなども含む、広義における表象のひとつとして捉えはじめる。悪筆を単なる悪筆として片付けず、自然物との交感を見出すところに、今福龍太という研究者の非凡さがある。

本著の中では日記に書かれたソローの肉筆と、ソローの描いた雲のスケッチが例示されているのだが、確かにそれらふたつの形状は似ている。「雲の形状の規則的な変化の裏に高度な法則性があるように、ソローの肉筆もまた、ある種の高次の法によって書きつけられた、生命の自在の表象なのである」という著者の言葉は、一見すると突飛なようだが、ソローの思想や作品にふれた多くの人々に共有可能な感覚なのではないだろうか。

著者がこの本の題名として選んだ「野生の学舎」ということばは、ソローのエッセイにおける「私は別種の学校において自分の教育を成し遂げたいのです」*I prefer to finish my education at a different school* という一文に由来する。

「野生の学舎」とは、「ソローのすべての実践と思考が育まれた場所」であると著者は説明する。「知性の本源を探求するために学ぶこと。心を大自然に開いて遊ぶこと。手仕事によって日々の生計に必要なわずかなものを得るために労働すること」この三つの行為を「おなじ意識と行動のなかで統合的に実践するための唯一無二の場」が、ソローの言う「別種の学校」であり、筆者の「野生の学舎」なのだ。故郷の町コンコードを毎日欠かさず散歩し、木々や湖に耳を傾け、そこに住む生きものや植物、風や季節の移り変わりを観察したソロー。当時のアメリカ合衆国における奴隷制やメキシコへの侵略に反対し、行動と言葉によってそれを表現したソロー。ソローが残した全ての足跡が、彼の言う「別種の学校」への道を私たちに指し示している。

ソローが兄のジョンとともに一時期運営していたという小規模な私設学校「コンコード・アカデミー」の風景は、著者にとってこの「野生の学舎」の概念の原型ともいえるものである。当時の中等学校にあたるその学校では、地元コンコードの子どもたちが学んでいた。ソローらはそこで「思想的に革新的な教育プログラム」を実践し、森や町の観察をカリキュラムに取り入れた。ある日の朝、生徒たちが教室に行くと、ひとりひとりの机の上にソローが置いた西瓜が一切れずつ置かれていたというエピソードが本著で紹介されている。「私たちがこれから探求する「野生の学舎」が教えようとする精神は、この甘やかな西瓜に凝縮されている」と筆者は述べる。大地

で育まれ、農夫によって収穫された西瓜の甘い果汁。花壇の乾いた土に水をやるときのように、果汁は西瓜を食する人のからだにみるみる染み渡り、その心身を育む糧となる。

筆者は、現代社会において実践されている、教育のありかたへの懐疑というもうひとつの要素をソローの「別種の学校」に足して、「野生の学舎」と名づけているように思う。ソローとともに自然を知り「私たちが、一度身につけたと思っている知識や情報を思い切って放擲し、近代の教育制度が捨て去ってきた、学びの別の可能性を試してみること」を筆者は提案しているのである。

特筆すべきは、著者はソローの思想を追いかけて「野生の学舎」という概念を提起するだけではなく、「野生の学舎」を実践する人でもあるということだ。2002 年から筆者が主催している「奄美自由大学」というプログラムでは、参加者たちが奄美諸島を訪れ、3 日間ほどその土地の自然や文化に触れて過ごす。2006 年には、その 2 年後にノーベル賞作家となるル＝クレジオも著者に導かれて奄美諸島を訪問し、その土地の豊かな自然と文化に触れてインスピレーションを得たという。雑誌「すばる」の 2006 年 5 月の特大号には、今福龍太とル＝クレジオ、両者のエッセイによってその旅の体験が綴られている。

奄美自然大学というかたちで既に実践している「巡礼型の野外学舎」に加え著者は本著の中で、「日本列島のある南の島の小さな村」の森の中に、ソローの原著を並べた「野生の図書館」を作るという自らの野望を明かしている。その図書館はまだ実現していないが、「この夢はまだ捨てていない」そうだ。その夢が実現した暁には、たとえそれが地の果てにあろうと、ぜひ一生に一度は訪れてみたいものである。